

# 信の開頭

——『選択集』「三心章」開説の意義——

安 富 信 哉

はじめに

法然教学の中心を凝集的にあらわしていることは、『選択集』の題号に続く、

南無阿弥陀仏 往生之業・念仏為本

(『選択集』・真聖全一—九二九頁)

といういわゆる「標宗の文」である。この念仏往生の立場は、南都北嶺に代表される聖道門に説かれる様々な行業、すなわち諸行往生の立場との緊張関係のなかで説かれた。法然は、これまでの伝統仏教が依ってきた諸行の無効性を説いて専修念仏を唱道したのである。

ここにおいて、出家発心(発菩提心)を本とせず、捨家棄欲を前提としない民衆の仏教が開かれる。すなわち男女貴賤、老少善悪を選ばず誰もが実践できる易行の一道が開示されることになる。その仏道を象徴的に表わす「念仏為本」の四文字は、菩提心為本の聖道門教学に対置されるべき意義を有する。

菩提心は、仏道修行者の必具の心であるばかりでなく、浄土往生を願う者にとつても欠くことのできない重要な心とされてきた。これに対して法然は、「雑行といふは……もろもろの読誦大乘、発菩提心、持戒、勸進等の一切の行

なり」(『三心義』法然全四五七頁)とあるように、菩提心を雑行に摂し、浄土往生には不要であるとした。

この法然の菩提心廃捨の主張の大きな根拠となったのは、善導のつぎのことばである。

上来、定散阿門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんに、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称するに在り。  
(『観經散善義』真聖全一―五五八頁)

これによると『観經』には、浄土の観想(定善)と浄土往生のための倫理的実践(散善)という定散二善の行を説くけれども、その本意は、あくまで衆生に弥陀の名号を称えさせる一事にあると説かれるのである。この『散善義』の説示に注目した法然は、この善導の解釈を根拠に、『大無量寿經』下巻「三輩段」に強調される菩提心の意味を逆転して、追釈した。

且らくこれを解せば、上輩のうちに、菩提心等の余行を説くと雖も、上の本願の意に望むるに、唯、衆生をして専ら弥陀の名を称せしむるに在り。而るに本願の中には更に余行なし。三輩ともに上の本願に依るが故に、「一向専念無量寿仏」と云ふなり。(中略)既に一向と云ふ。余を兼ねざること明らけし。既に先に余行を説くと雖も、後に一向専念と云ふ。明らかに知んぬ。諸行を廃して唯念仏を用ふるが故に、一向と云ふことを。もし然らずんば、一向の言、最も以て消し<sup>た</sup>けきか。  
(『選択集』「三輩章」・真聖全一―九四九頁)

法然の着眼点は、「一向」という文字にある。『大無量寿經』三輩段には、上輩・中輩・下輩の三段ともに、「一向専念無量寿仏」ということばと「発無上菩提之心」ということばがある。もし一向に無量寿仏を念ぜよというのであれば、菩提心を発せよということばは無効になる。なぜなら一向とは、「①一つにむかう。一点にむかつて行く。②ひたむきなこと。ひたすら。もっぱら。いちぢに」(『新漢和辞典』大修館書店二頁)などを示す語だからである。法然は、「一向といふは、一向・三向等に対する言なり。…既に一向と云ふ。余を兼ねざること明らけし」(『選択集』「三輩章」・真聖全一―九四九頁)と釈している。善導は、定散二善を廃して「一向に」称念せよと勧めている。一向に念仏

する者にとつては、菩提心すら不純とされなければならない。弥陀の本願の真意は、どこまでも念仏にあるからである。

このように法然は、菩提心を雑行に摂し、阿弥陀仏の本願には菩提心などの余行往生の教示はないと決した。法然の在世中に『選択集』を読んだ高野の僧都明遍は、「この書のおもむき、いささか偏執なるところありけり」と述懐したという（『法然上人行状絵図』巻十六・法然伝全七六頁）。明遍が本書のどの箇所を指してそういったかは不明だが、法然の菩提心否定の論説は、当時の仏教界を震撼せしめるに十分な内容を孕んでいた。この主張は、教界の常識からすれば、あまりにも破天荒な立論だったからである。<sup>①</sup>

建暦二年（一一二二）一月二五日に法然が入滅し、本書が開版されると、梶尾の高弁、並なま櫻の定照をはじめとして聖道諸家から批難攻撃の矢が放たれることになった。とりわけ高弁（明恵）は、本書の大胆な宣言に戦慄し、この年の十一月、『摧邪輪』（於一向専修宗選択集中摧邪輪）三巻を著し、これを烈しく糾弾した。この書の冒頭、上人は、

（『摧邪輪』巻上・淨全八一六七五頁）

と吐露し、本書の二種の大過として、

一は、菩提心を撥去する過失。

二は、聖道門を以て群賊に譬ふる過失。

（同）

を挙げ、さらにこれを細分して十三種の過失を挙げて摧破した。また翌建暦三年六月には『摧邪輪莊嚴記』一卷（淨全八）を著し、さきに挙げた十三種の過失に対して、さらに三種の過失を補説して、『選択集』を論難した。

菩提心は大乗仏教において最も肝要な心とされ、それ故に「発菩提心は、是れ仏道の正因なり」（『同』六九三頁）といわれる。しかるに法然は、罪惡の凡夫の浄土往生は本願念仏のみによるとし、善導の指南に導かれて、『観無量寿経』散善觀に説かれる三心（至誠心・深心・廻向発願心）をもって、念仏行者の必具の心とするのである。いわば三

心こそ、菩提心に代って依拠するべき大切な仏道成就の根本心とされるのである。

## 一 三心総体の了解

法然は、念仏為本の立場を、その念仏を受けとめる信心の問題と切り離して説いたわけではない。法然がその著述や法語、あるいは消息類に、三心を具足することの必要性を強調するのは、念仏が信心と離れてないことを示すためである。この三心について経には、

若し衆生有りて、かの国に生れんと願ぜん者は、三種の心を発して、すなはち往生す。何等をか三と為す。一に  
は至誠心、二には深心、三には廻向発願心なり。三心を具する者は、必ず彼の国に生ず。

（『観無量寿経』・真聖全一―六十頁）

と説かれている。ここでいう三心とは、浄土往生を願う念仏行者の信心を三通りに分類したものである。これらの三心を発して称名念仏すれば、必ず往生の業は成弁するというのである。法然は、この三心の教意を承けて、『選択集』に、

念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文

（『選択集』「三心章」・真聖全一―九五七頁）

という一章を設けた。いわゆる「三心章」である。この章題に、念仏と三心の不離なることが明説される。ここに「必」の一字が置かれているのは、三心こそ往生の因であることを示すものである。

つぎに積文において、法然は、善導の『観経散善義』および『往生礼讃』の三心積を引く。『観経』の三心の説明はいたって簡略な内容であるが、善導の解釈は詳細を極め、その積文も長い。ただ、三心相互の關係については説明されておらず、したがって三心の中心がどれで、どこに眼目があるのか分かりにくい。おそらく三心は各別のものとして扱われているようである。

『観無量寿経』は、聖道門の諸師からも歓迎された經典であり、それゆえその論疏も多くを数える。三心を解釈するについては、聖道門の諸師は『維摩経』に説く直心、深心、菩提心、あるいは『大乘起信論』に説く直心、深心、大悲心などと同義に解釈している。これに対して善導は、『観経』を『大無量寿経』および『阿弥陀経』と一連の経として把え、三心については、自らの深い宗教的体験から古今を楷定する釈義を施した。

いま法然は、「偏依善導一師」〔『選択集』結勸〕の立場から、専ら善導の解釈に基いて三心を受けとめ、如来の発願に対する深い領解を示した。すなわち「三心章」の私釈段において、

私に云く。引く所の三心は是れ行者の至要也。所以は何ん。『経』には則ち「三心を具する者は、必ず彼の国に生ず」と云ふ。明らかに知んぬ。三を具して必ず応に生を得べし。『釈』には則ち「若し一心少かぬれば即ち生を得ず」と云へり。明らかに知んぬ、一少けぬれば是れ更に不可なり。茲に因て極楽に生れんと欲はん人は、全く三心を具足すべし。

〔『選択集』「三心章」・真聖全一―九六六頁〕

と簡単な私釈を加えて、念仏する者は必ずこの三心を持たねばならないというばかりでなく、一つでも欠けたならば往生はできないといって三心を重視している。ただこの私釈段のことばは簡略で、三心の必要性和重要性を説くだけで、法然自身の三心に対する見解はうかがいにくい。

しかしながら法然は、この『選択集』のほかに『無量寿経釈』『往生大要鈔』『三心義』などを初めとして、いくつかの著述や法語あるいは消息において、これについて釈義している。私たちは、これらの諸書を通して、法然の三心観をみる事ができる。たとえば法然は、三心の要点と相互の連関について次のように略説する。

三心と申候も、ふさねて申ときは、ただ一の願心にて候なり。そのねがふ心の、いつはらずかざらぬかたおぼ至誠心と申候。このころまことに念仏すれば、臨終に來迎すといふことを、一念もうたがはぬかたを深心とは申候。このうへわが身もかの土へ生まれむとおもひ、行業おも往生のためとむくるを廻向心とは申候なり。この

ゆへにねがふ心いつはらずして、げに往生せんとおもひ候へば、おのづから三心はぐそくすることにて候なり。

〔法性寺左京大夫の伯母なりける女房に遣はす御返事〕・法然全五八九頁〕

この消息では、三心は個別の心ではなく、一つの心の展開であり、「まこと」の心（至誠心）をもつて、「一念もうたがはぬ」心（深心）を通して念仏を申し、「往生のためとむくる」こと（廻向発願心）であるという。また、このような心で念仏すればおのづから三心は「ぐそく」（具足）するという。この三心略義の末節に述べられている三心の具足については、別の法語で、

三心に智具の三心あり、行具の三心あり。智具の三心といふは、諸宗修学の人、本宗の智をもて信をとりかたきを、経論の明文を出し、解釈のおもむきを談して、念仏の信をとらしめんととき給へる也。行具の三心といふは、一向に帰すれば至誠心也、疑心なきは深心也、往生せんとおもふは廻向発願心也。かるかゆへに一向念仏して、うたかふおもひなく往生せんとおもふは行具の三心也。

〔東大寺十問答〕・法然全六四四頁〕

と述べられている。すなわち、(1)経論祖釈の文によって三心を具足するのが「智具の三心」、(2)一向に念仏して往生せんと思ううちに自然に三心を具足するのが「行具の三心」である。さきに引用した消息の三心略義は、行具の三心についていったものである。ともあれこのように三心を具足して申す念仏が法然のいう念仏である。

同時に注意されることは、『選択集』『三心章』に直接には言及されないが、法然が、『観経』の三心を、『大経』の三心（至心・信樂・欲生）と対応して語っていることである。たとえば、

今ま此の経の三心は、即ち本願の三心を開く。爾る故は至心とは至誠心也、信樂とは深心なり、欲生我国とは廻向発願心也。

〔観無量寿経釈〕・法然全二二六頁〕

と説かれる。これと同趣旨の内容は、『要義問答』、『十二問答』にもみられる。

しかし『観経』の三心と『大経』の三心について、法然は、両者を同列の位置においているわけではない。法然は、

『観経』の三心を『大経』の本願の三心の成就したものととして、『観経』の三心の各相をみられている。たとえば次の法語には、

又云、諸経の中にとくところの極樂の莊嚴等は、みなこれ四十八願成就の文也。念仏を勧進するところは、第十八の願成就の文なり。観経の三心、小経の一心不乱、大経の願成就の文の信心歡喜と、同流通の歡喜踊躍と、みなこれ至心信樂の心也と云り。これらの心をもて、念仏の三心を積したまへる也と云々。

(「十七条御法語」・法然全四六九頁)

と示されている。もともと第十八願の願文は、「至心信樂欲生」と読むべきであるから、必ずしも三心とは考えられないが、これを三心と呼んだのは法然を嚆矢とするであらう。<sup>③</sup>まさに『大経』の三心に照応して、『観経』の三心に着眼されたのである。

このように法然は、『大経』の三心を基底にして、『観経』の三心の意義を受けとめ、これを説いている。そのことは、法然が、『観経』の三心を理解するうえにおいて、『大経』の本願の立場からみられていることを明らかに示している。

## 二 三心各相の了解

以上、三心について、法然の了解を総論的にかがってみた。次にその三心の了解について各論的に概観してみた。

### 1 至誠心

『観経』で説かれる三心の第一番目に位置する至誠心について、善導は、これを真実心であると、

至誠心とは、至は真なり、誠は実なり、一切衆生の身口意業に修するところの解行、必ず真実心の中になすべきことを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性やめがたく、こと蛇蝎に同じきは三業を起すといえども、名づけて雑毒の善となし、また虚仮の行と名づく、真実の業と名づけざるなり。

〔観經散善義〕・淨念十一五頁〕

と釈している。すなわち至誠心とは、内に虚仮心をおこすことなく、真実心をもつことであるという。そしてこれに自利真実と利他真実のあることを述べているが、要するに身口意三業の解行を行なう場合に必ず真実心をもつて行なうべきであるというのである。

この善導の意を受けて法然は、  
至誠心とは是れ真実心なり。

〔選択集〕「三心章」・真聖全一―九六六頁〕

と押え、さらに

若し夫れ外を翻ひるがえして内に蓄へば、祇まことに応に出要に備へつべし。(中略)若し夫れ内を翻して外に播まさば、また出要に足んぬべし。

〔同〕九六七頁〕

と釈している。もし自己の表面に現わしているような賢善精進の相を改めて、これを内面にもつようになれば、迷いの世界を出離することになる。他方、自己の内面に抱えているような虚仮の相を改めて、外に現わすようになれば、やはり迷いの世界を出離することになる。と。理解しにくい説示ではあるが、内外一致の心を持ってという意である。法然が、

聖道門の修行は、智慧をきはめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚癡にかへりて極楽にむまると心得べし

〔禪勝房に示されける御詞〕其二・法然全六九六頁〕

と説かれたのは、この意趣を示すものと思われる。後学は、「内を翻して外に播すと云ふは、内には真実を以て外に



は不善を持ってと云ふ意なり。……三業の名利を捨てよと云ふ義なり」と義解している。<sup>④</sup>

この、内に真実をもつて、外に不善を示すという念仏者の至誠心については、

至誠心といふは、真実の心なり。身に礼拝を行じ、くちに名号をとなへ、心に相好をおもふ、みな真実をもちひよ。すべてこれをいふに、穢土をいとひ浄土をねがひて、もろくの行業を修せんもの、みな真実をもつとむべし。是を勤修せんに、ほかには賢善精進の相を現じ、うちには愚悪懈怠の心をいだきて修するところの行業は、日夜十二時にひまなく、これを行ずとも往生をえず、ほかには愚悪懈怠のかたちをあらはして、うちには賢善精進のおもひに任してこれを修行するもの、一時一念なりとも、その行むなしからず、かならず往生をう。これを至誠心と名づく。

〔三心義〕・法然全四五頁〕

と説かれている。まず、浄土への往生を願って修行する者は、「みな真実をもつとむべし」といい、(1)外に賢善精進の相を現じて、内に愚悪懈怠の心を懐いている者は、どのように策励しても往生を得ず、(2)外に愚悪懈怠の相を現じて、内に賢善精進の心を懐く者は、必ず往生を得る、という。ここに法然は、外面に賢善精進の相を示して、内に虚仮を懐く偽善的な態度を極力排撃するのである。<sup>⑤</sup>

## 2 深心

『観経』では、至誠心に続いて深心が挙げられる。この深心について善導は、

深心といふは即ちこれ深く信ずるの心なり。また二種あり。一つには決定して深く信ず、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなしと。二には決定して深く信ず、かの阿弥陀仏、四十八願をもて衆生を摂受したまふ、疑ひなく慮ひなくかの願力に乗じて定んで往生を得ると。

〔観経散善義〕・浄念、一五六頁〕

と釈し、さらに続いて釈迦・諸仏の衆生摂化の大悲を深信するべきことを説く。すなわち深心とは、自身が現に罪惡生死の凡夫であることと、弥陀・釈迦・諸仏が大悲をもって、このような凡夫を救済しようとすることを深く信ずることである。また善導は、この深心を『往生礼讃』に、

二には深心、即ちこれ真實の信心なり。自身はこれ具足煩惱の凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して火宅を出でずと信知し、いま弥陀の本弘誓願、及び名号を称すること、下十声・一声等に至るまで、定んで往生することを得と信知し、乃至一念疑心有ることなし、故に深心と名く。

（『往生礼讃』・淨全四―三五四頁）

と二種に分けて釈している。

これらの善導の解釈を受けて、法然は、

次に深心とは、謂く深信の心なり。当に知るべし、生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能入とす。故にいま二種の信心を建立して、九品の往生を決定する者也。（中略）明かに知んぬ、善導の意、また此の二門を出でざる也。

（『選択集』「三心章」・眞聖全―九六七頁）

という。善導は、この深信に就人立信と就行立信の二立信を説いて、信心の確立について詳細な解説を施しているが、法然は、右の私釈では、とくに信心こそ「生死の家」を出離して「涅槃の城」へと到る因であるとし、信心正因の立場を鮮明にした。

この二種深信の具体相については、

二に深心といふは、ふかく信ずる心なり。これについて二あり。一にはわれはこれ罪惡不善の身、無始よりこのかた六道に輪廻して、往生の縁なしと信じ、二には罪人なりといへども、ほとけの願力をもて強縁として、かならず往生を得ん事うたがひなくうらおもひなしと信ず。

（『三心義』・法然全四五頁）

と、『觀経散善義』の深心釈によって敷衍したり、あるいは、

深心、すなはち真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫なり、善根薄少にして、三界に流転して、火宅を出ずと信知して、いま弥陀の本弘誓願の名号を称する事、しも十声一声にいたるまで、さだめて往生する事を得と信知して、乃至一念もうたがふ心ある事なかれ。かるが故に深心と名づく（『往生大要鈔』・法然至五七頁）

と、『往生礼讃』の深心釈に基いて、やさしく言い替えたりしている。法然は、二種深信の意義を、念仏信仰の要として、このように様々な註疏・法語・消息類に大切に語っているが、いずれにしてもその内容は、善導の領解とほとんど同じで、これと異なるところはみられない。

ただ法然の深信釈で注意すべき点を強いて挙げるとすれば、二種をたんに二相的・並列的にみるのではなく、次第的・立体的にみているという点である。

たとえば前に引用した『往生大要鈔』において、「深心、すなはち真実の信心なり」として、これがたんなる深い心ではなく、信心であると押さえるところは、『往生礼讃』の釈を踏襲するものであるが、その意解を展開するなかで、

前後のことが相違して、心得がたきに似たれども、心を止めてこれを案ずるに、はじめには我が身の程を信じ、後には仏の願を信ずる也。ただし後の信心を決定せしめんがために、はじめの信心をばあぐる也。

（『往生大要鈔』・法然至五八頁）

と述べていることは注目される。すなわち法然はここで、二種深信においては、まず第一深信（機の深信）が肝要であり、そこから第二深信（法の深信）へと導かれるというプロセスを明示している。すなわち法然は、信心とは、自己が罪悪の身であり、到底救われる望みはない（「無有出離之縁」と信知することにおいて、阿弥陀仏の衆生救済の本願（定得往生）を信知することであるという。

このように法然は、善導の釈義に導かれて、この二種深信において、罪悪の衆生が弥陀の本願によって救われると

いう明瞭な救済論を世に唱道した。したがってその三心の位置づけにおいては、深心が中核に位置することになる。そのことは、端的に、

三心はまちまち区に分れたりと云へども、要を取り詮を撰て是をいへば、深心ひとつおさまれり。

(『三部經大意』・法然全三三〇―三三頁)

と説かれる通りである。法然は、深心を三心の中心にみるとともに、念仏の信心の眼目であるとされている。ここにおいて、善導の三心の解釈においては必ずしも明瞭ではなかった三心相互の関係は、深心が中心であることが鮮明になってくる。

### 3 廻向発願心

『観經』三心の最後に位置するのは廻向発願心である。善導は、

廻向発願心といふは、過去および今生の身口意業に修するところの世出世の善根と、および他の一切の凡聖の身口意業に修するところの世出世の善根とを随喜せると、この自他の所修の善根を以てことごとくみな、眞実深信の心中に廻向してかの国に生ぜんと願ず。ゆえに廻向発願心と名づく。(『観經散善義』・淨全一五八頁)

一切の善根を浄土往生のために廻向して浄土を願うことである。これについて法然は、『選択集』で、

廻向発願心の義、別の積を俟つべからず。行者応に之を知るべし。(『選択集』「三心章」・眞聖全一九六七頁)

と述べ、善導の疏の積に対して、私積を加えることはない。したがって別の法語においても、たとえば、

廻向発願心といふは、過去および今生の身口意業に、修するところの一切の善根を、眞実の心をもて極楽に廻向して往生を欣求する也。(『三心義』・法然全四四―四七頁)

とあるように、善導の釈を踏襲し、真実に裏づけられたあらゆる善根を、真実をもつて浄土往生のために廻向することであると述べている。

ただ、『選択集』「二行章」には、正行と雑行について五番の得失を列挙して、第四に回向不回向対を立て、これを釈して、

第四に不回向回向対といふは、正助二行を修する者は、縦令たとひ別に回向を用ひざれども、自然に往生の業と成る。

（『選択集』「二行章」・真聖全一―九三七頁）

と述べられている。すなわち正業である称名と助業である読誦・観察・礼拝・讚嘆供養等を修する者は、他に回向の行を用いることがなくとも自然に往生浄土の果を得るといわれる。したがって法然の回向発願心観を尋ねる場合、この五番相対における不回向の説示も併せて考慮しなければならない。法然は、この不回向の意に立つて、たとえば、一切の善根をみな、極楽に廻向すべしと申せばとて、念仏に帰して一向に念仏申さん人の、ことさらに余の功德をつくりあつめて廻向せよとは候はず。ただすぎぬるかたにつくりきたらん功德をも、もし又こののちなりとも、おのづから便宜にしたがひて、念仏のほかの善を修する事のあらんをも、しかしながら往生の業に廻向すべしと申す事にて候也。

（『御消息』・法然全五八四頁）

と述べられている。念仏者は、「ことさら」様々な功德を積集して廻向する必要はなく、過去に造った功德を、念仏に加えて修することがあった場合、それが廻向行に「おのづから」なることもありうるというのである。『往生大要鈔』に廻向発願心の釈を欠いているのは、あるいは不要とみたためかもしれない。

以上のように、法然の三心解釈において、廻向発願心は行者が特別に発すべきところではなく、念仏の信心のなかに自然に兆してくる心であるとみられる。三心の解釈の文脈からすると、深信に発露する願心であるとうかがわれる。『観経散善義』廻向発願心釈の文中には「真実深信の心中に廻向す」と説かれている。諸先学が指摘されるように、

廻向発願心の廻向心は、深心のなかに摂められると考えることができよう。

## おわりに

従来日本仏教は、菩提心をもって仏道の正因であるとみなしたのであるが、法然は、これを雑行に摂めた。この菩提心に代って重視されたのが『観無量寿経』散善観「上品上生釈」で説かれた三心、とりわけ深心である。法然は、とくに善導の指南に導かれて、「深心は、謂く深信の心なり」と押え、この信を救済の核心に据えた。これについて再度引用することになるが、法然は、

当に知るべし、生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能入とす。

〔選択集〕「三心章」・真聖全一―九六七頁）

と説いている。すなわち人間が生死流転の世界にとどまるのは、人間が「疑」（＝不信）を拠り処とするからであると  
する。

われらは信心おろかなるがゆへに、いまに生死にとまれるなるべし。〔念仏大意〕・法然全四（三頁）

と。そして、このような人間が生死流転の世界を出離して涅槃の彼岸に救済されるのは、ただ本願の力によるとし、「信を以て能入とす」と説く。<sup>⑥</sup>

仏道の実践において、信がこれほど重視されるようになったのは、法然からであろう。この信の開頭の歴史的意義について、坪井俊映氏は、

法然は菩提心を否定して信を本質とする浄土教を提唱し、信を基盤とする選択本願の念仏を説いた。従来の仏教諸家が仏教入門の初心としていた「信」をもって、菩提心に替る浄土願生者の心としたことは、日本浄土教思想展開の上において誠に注目すべきことである。<sup>⑦</sup>

と指摘されている。法然教学における信の開顯の意義は、この氏のことばに尽きるのである。

原始仏教の八正道において、大乘仏教の六波羅蜜において、あるいは三学において、信の文字はみえない。もとよりそのことは、仏教の伝統において信が軽視されたということではない。龍樹は、早く「仏法の大海は、信をもて能入とす。智をもて能度とす」(『大智度論』・大正藏二五卷六三頁a)と説いている。法然の「涅槃の城には信を以て能入とす」という指教も、おそらく龍樹のこの説示に基いているだろう。しかし仏道の実践体系において、「信」は初門の位置にあり、中心をなしてきたものは、「行」であつたことは否定できないのではないだろうか。

法然は、自らの聖道修行の挫折体験を通して、「我等は智慧の眼しみて、行法の足折たる輩也。聖道難行のさかしき道には都て望を断つべし」(『往生大要鈔』・法然全五〇頁)と痛切に感じとり、改めて「行」の仏教の意義を問い直した。そしてここに、「信方便の易行」(『下住毘婆沙論』・易行品)、「信仏の因縁」(『論註』上)によって、仏道を成就せんとする念仏の信の伝統が出遇われた。そして信心こそ「涅槃の城」に証入する道であると門侶に説いた。たとえば、われらが往生はゆめゆめわが身の善き悪しきにはより候まじ。(中略)ただ仏の願力を信じ信ぜぬにぞより候べき。(『正如房へつかはす御文』・法然全五四一頁)

と。その意味で、信の意義を開顯した「三心章」が『選択集』の中に置かれた意義は実に大きいといえるであろう。

## 註

- ① 袴谷憲昭氏は、法然浄土教を、異端仏教としての「本覚思想」に対する正統仏教として捉え、『選択集』では、完全に菩提心が否定されたと論じられている。ここでは、本覚思想と菩提心は不可分の関係に有るとみなされている。たしかに法然の菩提心否定論は、本覚門的仏教に対する否定という意味をもったといえよう(参照、『法然と明恵——日本仏教思想史序説——』大蔵出版)。しかし同時に私は、法然が「菩提心は諸宗各の意得たりと云とも、浄土宗の心は浄土に生れむと願るを菩提心と云へり。念仏は是大乗行也」(『三部経大意』法然全四四五頁)といっていることに注意したい。法然は、菩提心の本来の

意義を見出したともいえるのではないだろうか。

② 参照、吉蔵『観無量寿経義疏』（浄全五―三四三頁）、知礼『観無量寿仏経疏妙宗鈔』（同―三二七頁）。なお、日本天台宗の良源の『極楽浄土九品往生義』（浄全一五―一〇二頁）の解釈も同様である。

③ 『大経』の「至心信樂欲生」の願文について、梯実円氏は、「これを三心とよばれたのは法然が最初であった」と指摘されている（『法然教学の研究』永田文昌堂、二五六頁）。

④ 覚融行観著『選択本願念仏集秘鈔』三・西山全書別巻第四（文栄堂）三七二頁。

⑤ 金沢文庫に現存する『三部経大意』は、最古の古写本であるが、至誠心を積するに自力の至誠心は薄下の凡夫では起こすことができず、千人の中に一人もなしという。坪井俊映氏は、これらの説は『選択集』などにみられないものであり、はたして法然の言葉であるか疑わざるをえないと論究されている（『三部経大意』に見られる非法然的教説について）『仏教文化研究 所年報』創刊号、仏教大学、一―一四頁）。ただ、現在のところ私は、本書の法然撰述説に従いたい（参照、藤堂恭俊『法然上人研究』一、二五二―二八六頁、山喜房）。

⑥ 西川知雄氏は、「法然に於ては、無明の止揚は人間の力によってではなく、救済に於ける仏の力によってなされる」と教示される（『法然浄土教の哲学的解明』山喜房、一〇頁）。

⑦ 「法然教学における信について」『日本仏教学会年報』二八号一六八頁。

#### 略称

真宗聖教全書↓真聖全、昭和重修法然上人全集（石井教道編）↓法然全、法然上人伝全集（井川定慶編）↓法然伝全、浄土宗全書↓浄全、大正大藏経↓大正藏